12月生まれの天才

ジャン=アンリ・カジミール・ファーブル

(Jean-Henri Casimir Fabre、1823年12月21日 - 1915年10月11日)

今月はフランスの生物学者、昆虫の行動研究の先駆者であり、研究成果をまとめた「昆虫記」で有名なファーブルをご紹介します。

ファーブルの両親は貧しく、内職や弟の育児の邪魔にならないよう、小さい頃は祖父の家に預けられていました。距離にして20km程度しか離れていなかったので、頻繁に行き来はできたかもしれません。祖父の家の周りは自然が豊かで、その時期に昆虫や植物に強い関心を抱いたようです。15歳のときにアヴィニョン師範学校の奨学生募集に応募し一番の成績で合格します。授業に退屈したファーブルは校長にかけあい、3年の課程を2年で修了し、残りの1年は一人で博物学やラテン語の勉強をして過ごしました。師範学校卒業後、カルパントラの小学校の教師となり、児童がカベヌリハナバチの巣から蜜をとるのを見て昆虫の生態に興味を持ちます。その後数学と物理学の学士号を取得しました。また、31歳しの時に博物学の博士号を取得し、植物や昆虫の研究論文を次々に発表します。狩りバチの研究では科学アカデミーの実験生理学賞を受賞しました。

学問的には高い評価を得たものの、経済的には非常に苦しい状態が続いていたため、地元の産業に結びつく植物の研究を行い、アカネの根から赤い粉末染料を作ることに成功します。その後も地道に執筆活動を続け、ついに「昆虫記」を出版します。しかし10巻まで出版した後も知名度はさほど高くなりませんでした。

本が好き！

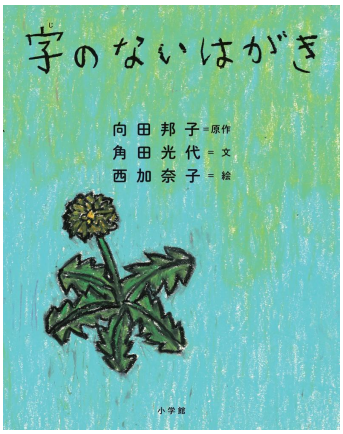
「字のないはがき」

原作：向田邦子　文：角田光代　絵：西加奈子

75年前まで、戦争をしていた日本には、空襲といって、たくさんの爆弾が落とされました。そのため、家族と離れ、空襲の激しい都会から田舎へ逃れて暮らす子どもたちがいました。それを「疎開」といいます。この物語は、疎開することになった妹と家族との本当にあったお話です。お父さんが、たくさんのはがきに、自宅の住所を書いて妹に持たせます。

「元気な日は、はがきに○を書いて、ポストにいれなさい」

妹は、まだ小さくて、字が書けなかったからです。やがて、疎開した田舎から、妹のはがきが届き始めます。あとのお話は、ぜひ自分で読んで、いろいろなことを想像してみてください。



この物語の妹の気持ち、家族の思い・・・。また、今も世界のどこかで戦争をしていること。自分の国を追われて暮らす人たちがいること。家族と散り散りになって生きる子どもたちがいること。そして、○を書いても×を書いても、はがきを出す相手が誰もいない人たちが大勢いること。

原作、文、絵を書いた三人とも、大好きな作家です。家族みんなで読んでいただきたい作品です。　（文・中屋敷）

除夜の鐘

除夜の鐘とは、大晦日の夜に深夜0時をはさんでつく、お寺にある大きな鐘の音のことです。お寺の境内に大きな鐘があるのを見たことがある方も多いでしょう。この鐘は正式名称を「梵鐘（ぼんしょう）」といい仏教の仏具で、梵鐘の音には苦しみや悩みを断ち切る力があると言われています。仏教ではもともと、正月とお盆の年2回ご先祖様を祀る儀式がありました。

それが時代と共にお盆はご先祖様のお参り、お正月は年神様のお参りという形に変化し、大晦日に除夜の鐘をつく儀式が風習として受け継がれていると言われています。「除夜」とは大晦日の夜を指す言葉でもあります。梵鐘自体は、普段から朝夕の時報や法要の開始の合図としてならしています。

通常は修行を積んだ僧侶がならすものなのですが、大晦日の除夜の鐘には一般の方にとっても「苦しみや煩悩を断ち切る」「ご利益を受けることができる」と言われているため、年末の儀式として広まったと考えられます。また、除夜の鐘をつく回数「108回」は有名ですが、その理由にはいくつかの説があると言います。

※　来月号（1月号）はお休みです。